東北大学東北アジア研究センター ニューズレター

CNEAS newsletter

Center for Northeast Asian Studies

102

2024 Autumn

巻頭言

4年前を回顧して今を考える

平野直人（准教授）

あれから4年、いま学術活動における対面の議論、討論の重要さを痛感している。新型ウィルス蔓延や感染者数増加が騒がれていた2020年3月、筆者は院生とともにドイツ・バイロイトで2週間の実験を行っていた。現地共同研究者との再会では握手をせずELBOW BUMPをした。得られたデータを机上にのせた研究者間の議論も楽しかった。渡航中に日本で入国制限がかかり、ガラガラの機内の中、帰国した。成田空港からは公共交通機関の利用が禁止され、レンタカーで移動、途中同行の院生を送り届け、普段の何倍もの疲れを抱えて仙台に帰宅した。それから2週間の自宅隔離は超絶もだえた。オンラインでの会議参加や論文執筆など、やることはもちろんあったが、卒業式を迎えた研究室の院生に会えないまま、好きに動けないストレスにひたすら耐えた2週間であった。同年夏にホノルルで行われる予定だった国際学会は、企画提案したセッションも含め、すべてオンライン開催に切り替えられ、正直どうでも良くなった。オンラインのセッションでは講演ごとに数個の質疑が行われるだけで淡々と進行し、休憩時間の井戸端会議と議論討論の中間のような会話も全く無かった。当然ながら現地で繰り出すビジネスディナーも無い。これで良いのか？こんな状況はいつまで続くのか？そればかり考えていた記憶がある。

あれから4年、"in-person"の議論、討論の重要さをひたすら痛感している。本年5月に行った筆者主催の日本地球惑星科学連合（JpGU）2024年大会巡検（写真）では、国内外の研究者・院生らとともに、現地で地質を眺めながらその成因に関する議論と、適用すべき試料の化学分析の議論など、現場で様々なアイディアが出された。あるアイディアを出し、露頭や岩石を指しながらさらなる修正アイディアをかぶせるような、実に濃厚な議論である。論文執筆や学会発表自体は物理的にオンラインで行う事は可能なのだが、そのバックグラウンドにあるべき生の議論が無ければ洗練されたアイディアは生み出されにくく、その先は続かないのだろう。

日本地球惑星科学連合（JpGU）2024年大会巡検の様子（2024年5月：釧路市）

しかし海外渡航は、昨年以降の円安基調や燃料費高騰、物価高が影響し、2019年以前の1.5～2倍の経費がかかるようになり、頻繁にできるものではなくなってしまった。新型ウィルス蔓延による入国制限・自宅隔離なんてはるか昔の思い出となったのに、自身も含めて海外で開催される学会に参加する日本人の数は減ってしまった。このままでは結果的に洗練された研究のアイディアが生まれにくくなっているのではないだろうか。そんな不安を抱いている。

contents

1 巻頭言
2 私の東北アジア研究
3 新任ごあいさつ
5 最近の研究会・シンポジウム、展示会ほか
6 受賞・成果のニュース
7 著書・論文紹介
8 活動風景

TOHOKU UNIVERSITY

私の東北アジア研究

新しい地域研究の価値をどう示すか？ 東北地方の地史理解のリファインメント

辻森 樹　地球化学研究分野／教授

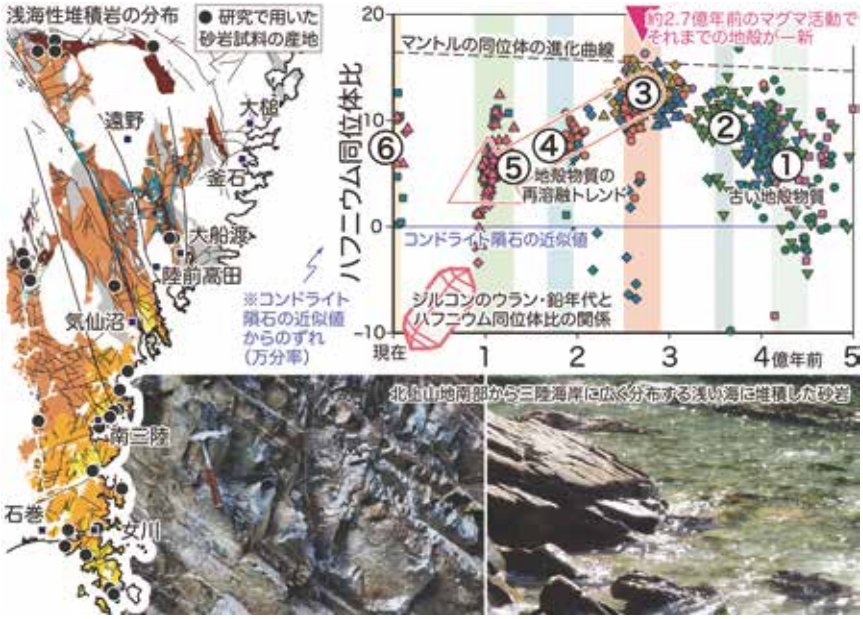


図 1. 過去 4 億年間に 6 回（約 4.3、3.6、2.7、1.8、1.1 億年前、約 770 万年前）の大きなマグマ活動があったことが明らかとなった。詳細は、https://doi.org/10.1016/j.epsl.2021.116893

日本列島の先新第三系 (約 6,600 万年より古い時代) の一般に基盤岩類と呼ばれる岩石は、北陸や山陰の一部に分布する大陸地殻の断片を除くと、海洋プレートの沈み込みによって成長する太平洋型造山帯に特徴的な岩石で構成されている。これらには、付加体 (海洋プレートが海溝から大陸の下に沈み込む際、海洋プレートを覆う堆積物などが剥ぎ取られて大陸の縁に加わってできる地質体) を構成する岩石、高圧型変成帯 (付加体を構成する岩石が海洋プレートの沈み込みに伴い、地下約 30–80 km のプレート境界面付近の温度圧力条件で変形・再結晶した後に地表付近まで上昇してきた高圧型変成岩の帯状分布域) に露出する変成岩、蛇紋岩 (沈み込む海洋プレート直上の上部マントルを構成するかんらん岩類が加水再結晶した変成岩)、前弧域 (火山列の海溝側) で形成した浅海性堆積岩などが含まれる。また、それらの岩石や地層を貫く花崗岩バソリス (花崗岩に代表される珪長質の深成岩を主とした複合岩体) は大きな体積を占め、そのマグマ活動によって温められた地熱地帯の地下約 10–15 km で既存の岩石が変形・再結晶した低圧型変成岩を伴う。1990 年代後半までに、国内の先新第三系基盤岩類の地域研究が列島各地の鉱産資源の分布や地史の理解を促進し、その結果、日本列島周辺の地体構造発達史と造山運動論が完成した。それ以降は再訪のフェーズに入り、さらに拡張と洗練を通じて理解を深める時代へと移行した。ローカルな地質史の理解を目的とした記載中心の地域研究はほぼ役割を終えたものの、地質現象の素過程と一般則の理解を目指す新しい地域研究の在り方には、今なお多くの課題が残されている。このような背景の中で、我々が暮らす東北地方の地史の理解には、果たしてリファインメントがあったのだろうか。

東北地方は、典型的な火山弧として世界に知られている。その主軸は、日本海溝に平行して南北に伸びる第四紀 (258 万 8000 年前より若い時代) の火山列と後期新生代 (約 1,150 万年前より若い時代) のカルデラ (大型の火山性円形くぼ地) 群によって特徴づけられ、奥羽脊梁山脈を形成する。この火山列の東側 (海溝側) には、盆地が細長く連なる地形的な低地域が存在し、この低地帯を隔てて北上山地から阿武隈山地に続く非火山性外弧が前弧域に広がる。一方、その西側 (背弧側) は、日本海拡大時期 (約 4,400 万 –1,200 万年前) の火山噴出物とそれに伴う海成堆積岩層に広く覆われている。ちょうどコロナ禍前、我々の研究チームは、岩手県・宮城県の北上山地南部から三陸海岸にかけて分布する約 4.4 億年前から約 1.3 億年前の浅海性砂岩層や現世の砂浜海岸の砂に含まれるジルコンという鉱物に着目し、東北地方のマグマ活動の記録解読を試みた。西オーストラリアのカーティン大学の実験室において、約 2,000 粒のジルコン結晶に強いレーザーを照射し、その表面の径 0.03 mm 程度の微小領域を瞬間的に昇華・微粒子化させ、2 台の質量分析装置を用いて、そのウラン・鉛系放射壊変を利用した形成時期と局所ハフニウム同位体比を同時に決定した。その結果、過去 4 億年間に 6 回の花崗岩バソリスの形成を伴うような大規模なマグマ活動の記録が見出された (図 1)。なかでも約 2.7 億年前のマグマ活動は非常に激しく、それまでに存在した地殻のほとんどを新しく置き換えたことが明らかになった。手法そのものに特筆すべき新規性はなかったが、東北地方も含めて国内の地域研究において初めてのまとまったデータセットを国内外に発信することができた。列島になったはるか以前の大陸縁の地殻進化の理解を深めるための研究であると同時に、北上山地南部という一つのローカルな地域研究から、現在のアジア大陸東縁の地殻進化に関する一つの標準パターンを提示することができ、結果的に新しい地域研究の価値を示すことができた事例となった。

つじもり・たつき　東北アジア研究センター (兼 理学研究科地学専攻)・教授　2015 年 9 月より現職。2013 年アメリカ鉱物学会フェロー、2014 年アメリカ地質学会フェロー、2021 年日本鉱物学会賞。
https://orcid.org/0000-0001-9202-7312

#1

Kotlerman Dov-Ber

客員教授
（2024年6月～9月）

ドブ＝ベル・コトラーマン ▶ 2001 年にバルイラン大学でイディッシュ研究の博士号を取得して以来、現代ユダヤと文学に携わる。現在、バルイラン大学ユダヤ民族文学科教授。

ロシア極東のユダヤ人入植者の視点から見た日本人:1928-1949年

translator: デレーニ・アリーン

1928 年から 1949 年にかけてロシア極東におけるユダヤ自主管理区域（通称ビロビジャン）発展に係るプロジェクトは、ソビエト当局にとって、地域の発展に貢献できる勤勉な人々を呼び込む機会として推進し、同時に満州（実際には日本）の国境に前哨基地を作る手段とも見なしていた多面的な事業でした。実際、日本による満州国の設立、満州・ソビエト国境での武力衝突、および太平洋戦争は、その後ユダヤ人移民（主に彼らの母語であるイディッシュ語で、当時自主管理区域の公式言語であった）の間の論争に大きな影響を与えました。さらに、他のソビエトの少数民族とは異なり、ユダヤ人のこの出来事に関する言説はソビエト連邦の外でも広く伝播されています。私の研究は、この複雑な状況がユダヤ文化圏でどのように反映されたかを検討することが目的です。この研究は、北東アジアの歴史の未研究の側面に新たな光を当て、ソビエト連邦、日本、そしてユダヤ人コミュニティとの間の複雑な関係を理解するための貢献をすることができます。

#2

SKUZOVATOV Sergei

客員准教授
（2024年7月～9月）

スクゾバトフ・セルゲイ ▶ 2012 年ノボシビルスク国立大学で PhD 取得後、ロシア科学アカデミーシベリア支部ヴィノグラードフ記念地球化学研究所に勤務。現在、同研究所の科学担当副所長。

部局間学術交流協定の締結後、初めての招聘

text: 辻森樹

スクゾバトフ先生は 1986 年生まれのロシアの岩石学分野を代表する若手研究者の一人で、国際的にその活躍が知られています。2007 年にノボシビルスク国立大学大学院で岩石学の修士号を取得後、2012 年に同大学院で鉱物学・結晶学の PhD を取得しました。2012 年から現在まで、イルクーツクにあるロシア科学アカデミー（RAS）シベリア支部ヴィノグラードフ記念地球化学研究所において研究に従事しています。これまでに、ロシア連邦サハ共和国産のダイヤモンドの研究に取り組んできた他、近年は、世界で最も大きな付加型造山帯である中央アジア造山帯西部地域の研究に力を入れています。特に最近は、カザフスタン中央部の古生代前期の高圧型変成岩の研究において、局所ストロンチウム同位体分析法などの先端的な地球化学の手法を応用した研究を展開しています。RAS シベリア支部と本学との間には、1992 年に交流協定が締結されており、先生が所属するヴィノグラードフ記念地球化学研究所と東北アジア研究センターは、2016 年 8 月 15 日に部局間学術交流協定を締結しました。今回の招聘は、日ロ間の学術交流を促進しようという双方の願いによりコロナ禍前に決まり、その後随分時間が経ちましたが、ようやく実現しました。今後も、センターのロシア及びその周辺地域の研究における重要なカウンターパートとして、学術交流の発展に大きく寄与していただけることでしょう。

#3

日本の沿岸コミュニティにおける女性の役割

translator: デレーニ・アリーン

Ekaterini (Katia) FRANGOUDES

客員准教授
（2024年10月～12月）

エカテリニ（カティア）・フラングデス ▶ 1992 年にパリ大学で政治学の博士号を取得して以来、社会科学者としてジェンダーと資源管理、漁業、養殖業を研究している。現在、フランス・ブレスト大学 AMURE 研究センター教授（上級研究員）。

多くの国々では、漁業や養殖における女性の関与が見過ごされ、過小評価されています。しかし、女性は小規模な漁業や養殖の運営とビジネスにおいて重要な役割を果たし、社会に仕事や富を提供しているのです。また、女性は国を超えた食料主権の確保や沿岸コミュニティの福祉にも貢献しています。漁業における女性の認識不足は、社会的、経済的、そして生態的に広範囲な影響を及ぼします。小規模漁業や養殖における性別不平等は、気候変動、海洋汚染、政治的および管轄権の対立、若者の不足、人的移動、衛生危機など、世界中の沿岸地域で生じている複雑な課題に対処するための能力を損ないます。私は漁業に携わる女性たちとの活動の一環として、ヨーロッパの漁業女性組織のネットワークである AKTEA を共同で設立しました。AKTEA は、漁業と養殖業における女性の役割を認めさせ、これらの分野における男女平等を実現するために活動しています。

三ヶ月間の滞在中に、私は日本における小規模漁業および養殖のガバナンスと政策に性別平等措置を統合する方法を調査する予定です。具体的には次の 3 点に焦点を当てます：(a) 漁業における女性の可視性の向上；(b) 女性起業家の育成；(c) 女性のネットワークや組織の支援と効果；(d) 漁業ガバナンスへの女性の参加を増加させる努力。これらにより、漁業および養殖業における性別に関する知識を向上させ、性別間の平等を促進することが目的です。そして、日本の科学者や関係者との経験交流も、私が北東アジア研究センターに滞在するもうひとつの目的です。

#4

レトリック、メタファーと日中関係の語り方について

WANG Guangtao

客員准教授
（2024年7月～8月）

王・広涛 ▶復旦大学日本研究センター准教授、2017 年名古屋大学大学院法学研究科（国際法政専攻）博士課程修了、比較法学博士。専攻は日中関係史、日本政治外交史、東アジア国際関係論。

私は戦後の日中関係の語り方を研究しています。その語り方に特に注目するのは政治的レトリック（political rhetoric）です。レトリックとは言い回しを工夫することによって、相手の感情に訴えかける方法であります。日中関係の場合にそれは単に日中関係の状況を反映するものだけでなく、対象国に対する説得や競争も意味します。私の研究では、国際政治言語学（international political linguistics）の観点から、日中関係における代表的なレトリック（たとえば、「一衣帯水」、「日中関係の新時代」、「政冷経熱」など）を検討し、その政治的意味と効果を究明します。代表的なレトリックの中には、日中両国ともに受け入れられているものもあれば、（一方的に）受け入れられていないものもあります。レトリックがどのようにして日中関係の実態を反映したのかという検証は主な仕事であります。研究の内容は主に以下の三点となります。第一に、レトリックの合意形成過程であります。レトリックはどちらか一つの国によって提出され、相手国への説得を経過しなければなりません。第二に、合意されたレトリックは日中両国でどのように語られ、実際の日中関係にどのような影響を与えたのか、もしくは日中関係はレトリックの語り方にどのような影響を与えたのかを検証します。第三に、レトリックの消滅であります。すなわち、レトリック（全部ではありませんが）が日中関係において使えなくなる政治的な理由を検証します。

REPORT

最近の研究会・シンポジウム、展示会ほか

東北大学教養教育特別セミナー

人間社会における攻撃性と紛争

田村光平
（環境情報科学研究分野／准教授）

撮影：波多野悠夏氏

会期 2024年 4月 15日
会場 東北大学マルチメディア教育研究棟

本セミナーは、紛争という、日本社会がしばらく直視せずにいた対象を、複数の分野の視点から論じたものである。筆者は人類史関連分野の紛争研究について報告した。国際法の植木俊哉副学長、進化生物学の河田雅圭総長特命教授と並んでの不釣り合い極まりない登壇となった。学生からの質疑も盛況で、時間を大幅に延長することとなった。講演録を作成中であり、『教養教育院セミナー報告 2024』に掲載予定とのことである。筆者は、自分が生きているあいだに世界から紛争を駆逐できる可能性については懐疑的だが、紛争の被害を減らすために、微々たるものだとしても研究を蓄積し続けなければならない課題である。その将来に僅かでも貢献できていれば嬉しい。

セミナーの様子

第 6 回みちのく歴史講座

学校日誌を守る、読む、活用する —地域史料としての学校資料—

竹原万雄
（上廣歴史資料学研究部門／助教）

会期 2024年 6月 22日
会場 東北大学マルチメディア教育研究棟（宮城県）

講演会のポスター

上廣歴史資料学研究部門では、歴史研究の成果を市民の方々と共有すべく「みちのく歴史講座」を企画している。第 6 回は、10 年以上にわたって学校日誌の調査に取り組んでいる大平聡先生（宮城学院女子大学特任教授）を講師にお招きした。講演は「災害の記憶」「くらしの記録」「戦争の記憶」の三部で構成され、調査した学校日誌の画像 100 枚以上を次々とご紹介いただいた。災害時の被害状況や被災者支援、学校で禁止される「パッタ」（めんこ）遊び、赤字で記された仙台空襲や敗戦後の思いなど、当時の様子がリアルに感じられ、地域史料としての学校資料の重要性を痛感した。会場からも、学校日誌の豊富な情報への驚きや自身でも読んでみたいなど多くの感想をいただいた。

2023年度 東北大学東北アジア研究センター研究成果報告会

寺山恭輔
（ロシア・シベリア研究分野／教授）

会期 2024年 6月 26日
会場 東北大学片平北門会館エスパス

センター内外で公募し、2023 年度に実際された共同研究の成果報告会が開催された。単年度、複数年度にまたがる共同研究 17 本、研究ユニットから 1 本、計 18 本の担当者が報告した。当日は午前 10 時から、昼食と休憩を挟んで午後 6 時までの長丁場だったが、センター関係者 25 名の他に、センター外から 20 名（しかも 12 名は学外者）の参加を得て、外部にも広く成果を発信する有意義な報告会となった。共同研究の外部評価を行うモニターとして羽田正東京大学名誉教授、田畑伸一郎北海道大学名誉教授も参加された。研究推進委員会のメンバーが司会を担当したが、報告 15 分、質疑応答 5 分という限られた時間のなか共同研究の内容をお互いにチェックする年に一度の貴重な機会となった。

報告会の様子

共同研究

清代モンゴル社会における自生的秩序生成に関する研究（1～3回まとめ）

岡 洋樹
（モンゴル・中央アジア研究分野／教授）

会期 2024年 5月 31日、6月 18日、7月 22日
会場 東北アジア研究センター大会議室・オンライン

研究会ポスター（第一回）

本研究会は、本共同研究の研究分担者が、研究の成果共有の場として開催しているものである。清朝（大清国）は、「外藩」と呼ばれる統治範疇を設けることによって、歴代中国王朝とは異なる独自のモンゴル遊牧民統治を行った。本研究では、この時代のモンゴル社会の秩序生成の様態と清朝統治への影響を多面的に考察する。第一回研究会では研究代表者岡が、この時代に活性化した人の越境移動を、第二回は佐藤憲行（復旦大）が外モンゴル・フレーを事例とした統治秩序を、第三回はフフムチル（内蒙古大）がハラチンにおける移住漢人の包摂の様態、ブレンソド（内蒙古師範大）が同地方の財産相続に関して報告を行った。本年度末に国際シンポジウム開催と論文集の刊行を目指す。

Film event

東北アジア研究センター人類学研究会

会期 2024年 6月 18日
会場 東北アジア研究センター 大会議室

シベリア・チュコトカ民族誌に関わる伝統的死生観と、現実の社会問題としての自死について、ヤロスラヴァ・パナーコヴァ客員准教授（ニューズレター 101 号で紹介）の研究発表と、彼女自身が監督を務めた映画の上映が行われた。

現地先住民族であるチュクチの人々は、ロシア風の名前以外に、「よみがえりの名前（return name）」とも呼ばれるチュクチの名前を持つ。多層的な人格がこの地域に存在し、その構成要素の一つが祖先であるという考えが背景にある。これについての社会人類学的な報告があり、続いて映画が上映された。詳しい報告はセンター HP をご覧いただきたい。

http://www2.cneas.tohoku.ac.jp/content/files/20240620report.pdf

受賞・成果のニュース

程永超准教授が第13回2024年度三島海雲学術賞（人文科学部門）を受賞

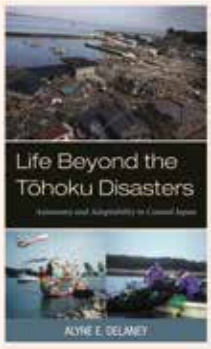
本センターの程永超准教授が、第 13 回三島海雲学術賞(人文科学部門)を受賞した。

本賞は、カルピス創業者の三島海雲が設立した三島海雲記念財団が、設立 50 周年を機に 2012 年に創設したものである。自然科学及び人文科学の研究領域において、創造性に富み、とりわけ優れた研究能力を有する 45 歳未満の若手研究者を顕彰し、その研究の発展を支援することを目的としている。人文科学部門では、アジアに関する人文社会科学諸分野の学術研究（日本に関わる研究を含む）を対象としている。程氏の受賞対象となったのは、『華夷変態の東アジア：近世日本・朝鮮・中国三国関係史の研究』(清文堂出版、2021 年)である。

7 月 5 日、東京会館（東京都千代田区丸の内）で贈呈式が開催され、三島海雲記念財団理事長の羽田正氏より程氏に賞状が授与された。授賞式では、審査委員長である京都大学名誉教授の山室信一氏による講評が行われた。程氏の著作は、これまでで最も多い 24 点の推薦から選ばれ、近世独特の東アジア国際関係の全体像に向けて新たな研究の視野を開き、近世東アジア三国関係史という視角を明示的に打ち出した意欲的な業績として高く評価された。

授賞式で羽田理事長が程准教授に賞状授与

BOOKS
著書・論文紹介



ISBN 978-1-7936-1655-5
Hardback
ISBN 978-1-7936-1656-2
eBook

Life Beyond the Tōhoku Disasters:
Autonomy and Adaptability in Coastal Japan

text: デレーニ・アリーン

デレーニ・アリーン (DELANEY Alyne) 著 Lexington Press 2024 年 5 月刊

近年、災害の分野で多くの社会科学的研究が蓄積されてきた。しかし、地域の文化や社会を理解するために、災害前の生活と結びつけて災害後の社会を分析した研究はほとんど存在しない。この論文では、著者が20年以上にわたる宮城県沿岸地域での現地調査経験をもとに、地元の人々の文化や生活を文脈化し、災害復興政策が地元社会に与える主な影響を示している。彼らの暮らす場所や海の景色への愛着、お互いとのつながりや共有の伝統、海に関連した仕事の重要性が描かれている。この研究は、災害の悲劇や個人および沿岸コミュニティにかかる負担を明らかにするだけでなく、コミュニティの回復についての洞察も提供している。本書は、自律性と適応力という地域の文化的特性の力強さを、読者に存分に伝えるだろう。

ISBN 978-3-7597-1184-7

Vladimir Il'ich Iokhelson: Personal Memoirs from Siberia

Michael Knuppel, Oleg Pakhomov 著 BoD (Book on Demand) 2024 年 4 月刊

text: パホモフ・オレグ

2024年4月、ドイツの出版社ブックス・オン・デマンドから『Vladimir Il'ich Iokhelson: Personal Memoirs from Siberia』が出版された。本書は、Michael Knüppel(聊城大学)とOleg Pakhomov(東北大学)による共同研究の成果であり、ロシアの著名な人類学者であるV.I.ヨヘリソン (1855-1937)の未発表の回想録を収録している。ヨヘリソンは主にロシア極東の少数民族の専門家として知られている。しかし、彼の科学への道は、革命活動から始まる複雑なものであった。ヨヘリソンは人民挺身隊運動に積極的に参加し、皇帝アレクサンドル2世の暗殺の準備に関わった。本書は、彼の革命家としての過去、投獄と政治亡命の数年間、そして彼がいかに科学的研鑽の道へと導かれたのかについて詳述している。本書は、ロシア史、ロシア極東の少数民族の民族誌的研究の歴史に関心を持つすべて人々の興味を惹きつけるだろう。

ISBN 978-4-7503-5468-2

ロシア極東・シベリアを知るための 70 章

服部倫卓・吉田睦編 明石書店 2024 年 5 月刊

text: 高倉浩樹

明石書店から、2024年5月に服部倫卓・吉田睦編『ロシア極東・シベリアを知る70章』が刊行された。本書は、考古学・歴史学から人類学および現代政治経済、さらに気候変動に関わる文理融合研究やエネルギー問題まで総合的に目配りされた図書である。その特徴は、Ⅱ部の＜歴史＞において、シベリア出兵やシベリア抑留、サハリン残留朝鮮人・日本人など、日本との関わりについて描かれている点である。またⅣ部の＜現代の諸問題＞では、日ロ経済協力やウクライナ侵攻の影響など最新情報もある。中でも類書にないものはⅤ部で共和国や州・地方などシベリアの全地方行政区の特徴をカバーしている点である。大変貴重な情報である。センターからは高倉浩樹のほか、助教や研究員としてかつてセンターに所属した5名の研究者が寄稿しており、全著者の10%を超えている。これは東北アジア研究センターが展開してきたシベリア研究の歴史的成果といって良いだろう。

モンゴル国とトゥヴァ共和国の辺境貿易

寺尾萌
（マイノリティの権利とメディア研究連携ユニット／学術研究員）

1

私は2014年からモンゴル国北西部に位置するオブス県で社会人類学的調査研究を行っているが、10年の間にモンゴルの人やモノの移動は質量ともに大きく変化した。首都と地方を結ぶ自動車道の舗装がほぼ完了し、自動車所有が増加したことで個人のモビリティが高まった。スマートフォンやソーシャルメディアの普及は、個人が中韓ロを主とする近隣諸国から商品を買い付け、販売することを容易にした。そのため近年、輸入品の転売ビジネスは本業としても副業としてもポピュラーになっている（通関手続きの不要な範囲内で品物を購入し、知人に販売する場合もある）。

とくにオブス県で調査をしていて気づくのは、隣接するロシア連邦トゥヴァ共和国との間での人・モノの移動の顕著な増加である。県都ウランゴムでは以前からロシア産の果物、食品、衣料、家具等の店が並び、ロシアからの輸入品が好んで消費されていた。さらに2014年にはモンゴルとロシアの間で相互滞在に関する合意が成立し、30日間の滞在について査証が不要となったため個人の訪問が容易になった。COVID-19パンデミックを経て2022年8月にオブス県を再訪すると、両国間の相互訪問は益々活発になっていた（一時閉鎖されていた国境検問所は2022年4月に再開した）。ウランゴム在住のあるモンゴル人女性は、年金を受け取る傍らで、友人と頻繁にトゥヴァの首都クズルを訪れて商品を仕入れ、知人に販売している。彼女はその理由を、ロシア製品は高品質で、果物や食品は清潔だから、自分でも食べたいと思うし他の人にも食べさせたいと思うからだ、と語った。ソ連の影響下で社会主義的近代化を経験したモンゴルの人びとにとって、ロシア製品は現在でもある種の憧れや信頼の対象である。

一方で、ウランゴムの中央市場はトゥヴァからの買い物客で賑わう。25kg以内と定められた個人利用の範囲でまとめ買いをする家族連れや大量の商品を仕入れる商人が、ひっきりなしに店舗を訪れる。購入される商品は中国側国境から仕入れる電化製品や日用品で、とくに仏教文様やモンゴル文様、馬や家畜の図柄など、トゥヴァの人びとにとっても親しみのある特徴をもった商品が人気だ。取引には基本的にルーブルが用いられ、トゥヴァ語を話せる商人の店舗にはより多くの客が訪れる。日用品を売るある女性商人は、トゥヴァからの買い物客のおかげで月の売り上げが2倍になったと話した。ウクライナへの軍事侵攻の影響で諸国との断交が続くなかで、トゥヴァの人たちにとって国交を維持する隣国を通じた人・モノの移動・交流は重要なライフラインになっているということも、このことの背景にあるようだ。オブス県に暮らすモンゴル人の多くは「戦争は遠いところで起きている」「トゥヴァやそこに暮らす人々が危険なわけではない」と政治的問題とは距離をとりながら活発にトゥヴァと交流している。

2

本年度、本センターのヴィクトリア・ピーモット研究員および文学部の包双月助教と共同で、中蒙ロ辺境貿易の歴史と同時代の動向に関する調査研究を行う機会を得た。本センターでの出会いに感謝し、実りある共同研究になるよう努めたい。

1：ひっきりなしに訪れる客の応対の合間に汗をぬぐう商人。
2：ルーブル紙幣を数える布地商人。民族衣装を縫うために民族文様の布地を買っていく客が多い。

編集後記

この秋号では、4名の海外からの客員研究者を紹介しています。世界中から集まった彼らの滞在は、世界の出来事を私たちの身近に感じさせるとともに、研究における彼らと私たちの協力関係を強めます。過ごしやすい気候となるこの季節に、共同研究が私たちの活動の大きな推進力となることを願います。（デレーニ・アリーン）

CNEAS
Center for Northeast Asian Studies

東北アジア研究センターは、文理連携・学際的なアプローチによって、シベリア・モンゴル・中国・朝鮮半島・日本における歴史・社会・自然を総合的に捉えることをその使命とする研究所型組織です。

東北大学東北アジア研究センター
ニューズレター 第102号

2024年9月27日発行

編集：東北アジア研究センター広報情報委員会
発行：東北大学東北アジア研究センター
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41
TEL 022-795-6009　FAX 022-795-6010

Facebookをチェック!
X（旧Twitter）をチェック!

ISSN 1344-9095